

詩編 17 編 (1) の黙想 主よ、瞳のようにわたしを守り、あなたの翼の陰に隠してください。(2020年5月8日分 TM)

どこからか埃が飛んできたり、飛沫が飛んできたりするとき、一瞬で瞼が閉じ、眼を護ります。「ああ、埃が飛んできた、瞼を閉じなければ」などと考えません。また、大きな猛禽類や獣があなたを狙っています。しかし、ヒナを抱えた鳥はその羽を精一杯広げ、その陰にヒナ鳥たちを保護します。主なる神が、そのように瞬時にあなたを護り、また、温かい隠れ場を与えて下さることを黙想しましょう。今朝あるいは今晚は詩編 17 編 1～8 までを読みましょう。

8 節「あなたの目 ('a·yin 単数) の瞳 (keisown=the apple)。アップルの「林檎」以外の意味は馴染みがありません。しかし、英訳では、the apple of the one's eye は「非常に大切なもの、掌中の玉」という熟語です。瞳は瞬間的に目を護ります。翼の陰 (baesel kaenapekā) については、ルツ 2:12、詩編 36:8、91:4、イザヤ 8:8 (インマヌエル預言)、マタイ 23:37 (ルカ 13:34) にも登場し、親鳥が羽を広げてヒナたちを護る姿。

・「祈り」の頭書があるのは、86、90、102、142 編で、古代の祈禱書の名残でしょうか? 72:20 には、「エッサイの子ダビデの祈りの終わり」とあり、古代の詩篇集の名残かも知れません。詩を読んだ全体的印象は、むろん、神に祈り、信頼して生きることの大切さということではありますが、神に対して、そして、詩人たち敬虔な者たちに対しての、身体的・具体的表現が豊かであるということです。神に向かい、「耳を」傾け (1 節、6 節)、「目」をもって公平にご覧下さい (2 節) と呼びかけます。あなたの「唇」の言葉を守ります (3-4 節) と約束し、「右の御手」をもって救って下さい (6 節)、「御手をもって」彼らを絶ち (14 節)「瞳のように」守り、あなたの「翼の陰に」隠して下さい。「御顔を向けて」彼らに迫り (13 節) と願います。「御顔」を仰ぎ望み、「御姿を拝して」満ち足りることができるでしょう (15 節)。他方、祈り手の身体・内面の表現も多いです。「わたしの叫び」「いのり」「唇」に欺きはない (1 節)、「わたしの心」「わたしの口」(3-4 節)、「私の魂」を助け出してください (13 節)。このような、神と祈り手の身体的表現をダブらせ、多様にすることで、神と詩人との間の「親しいコミュニケーションと信頼をリアルに」描いています。

・1-2 節 詩人は、「主よ、正しい訴えを聞き、わたしの叫びに耳を傾け、祈りに耳を向けてください」と呼びかけます。最初の言葉は、「聞いてください」(sim·'ah)。新共同訳は「正しい訴えを」ですが、「義なる神よ」(LXX 訳参照) と、「正しさ」を自分の訴えではなく、主にかけることも可能です。青木澄十郎は「主よ、義よ」と翻訳。ヴァイザーは「わが救いなる主よ、聞いてください」と訳します。「わたしの叫びに耳を傾け」は (haq·sibah) は、注意して聞く (attend) で、「傾聴」「心を止める」を意味し、直接「耳」の該当語はありません。三番目の「耳を向けて」(ha'azi·ah) は「耳を与えること」。詩人の祈りは欺きの唇 (sipte) からではありません。言葉遣いや文脈から詩人は、神を信じない敵に濡衣を着せられ、神殿で神の審きを待ち (2 節)、神の助けを懇願しています (6 節以下)。2 節は人の目ではなく、「あなたの目 (eneka 複数両目) で見てくださいますと願います。

・3-5 節 (3-4 は原文がゴツゴツして難解) 祈り手の無実の声明：主に審きを求める詩人は、神が心をテストし、夜 (こっそり) 訪問されて、試されても、私が何か違反していることを何も見つけないだろう。たと思いはあっても、口の語る言葉については (pi= my mouth)、行き過ぎないようにしており、人としての行動に関していえば、あなたの「唇」(se·pa·teka) の言葉によって、破壊者たちの径から自分を守っていますと言います。独善的な罪を否認ではなく、不当な告発への弁明なのです。